

何のための誰のための原子力

=コールドーホール改良型発電

炉の導入について=

安 江 良 夫

何のための誰のための原子力

= コールダーホール改良型発電

炉の導入について =

安 江 良 夫

まえがき

昭和31年5月、当時イギリス原子力公社の産業開発部長をしていたクリストファー・ヒントン卿が読売新聞の招きで来日し、「コールダーホール改良型発電炉の発電コストはKWH当り0.6ペンス(2円52銭)になる」と発言してから、各方面に議論をまきおしながら進められてきたこの炉の導入問題もようやく大詰めにきている。いま原子力発電会社のこの炉を審査している原子力委員会と通産省の合同審査小委員会は、10月末に「安全と認められる」との結論をくだすようであり、その報告にもとずいて原子力委員会は11月末にこの炉の設置を正式に認可したい意向である。しかし、この炉についておよび炉の導入について各方面から批判されていた問題点がすべて解決されたのかといえ、事実上はむしろ逆であって、重要な問題点についてはなにひとつ解決されていない。

そもそも大型発電炉を導入するには、それなりの「必要性」と「条件」がそなわっていないなければならない。大型発電炉の潜在的な危険性は従来の産業災害とは比較にならないほど大きいので——万一の重大事故の際に大量に放出される死の灰(核分裂生成物)による被害はきわめて広範な地域にわたり、かつ遺伝

的障害によって幾世代にも及ぶことが予想されている——、このような大きな危険性にもかかわらずなお大型発電炉を導入しようとするには、どうしてもいますぐ導入しなければならないという切実かつ緊急な「必要性」とできるかぎり安全性を確保するとの「条件」が満足されていなければならない。

これはきわめて当然のことだが、今度のコールダーホール改良型発電炉(電気出力15万9000KW天然ウラン・黒鉛減速・炭酸ガス冷却)の導入にはこの当然の「必要性」と「条件」がそなわっているかどうか疑問のフシが多い。原子力発電会社はもちろん、初めから導入を認めることに傾いている原子力委員会などは、「近き将来エネルギー需給の窮迫する日本では早急に原子力発電を行う必要があり、またわが国の原子炉技術の向上をはかるためにも発電炉の導入が必要である。それに今度のコールダーホール改良型は安全であり、発電コストも新鋭火力発電とコンパラブルである」としている。しかしこの炉の安全性については重大な疑問点があり、発電コストも火力発電よりはるかに高い。さらにわが国での原子力発電の緊急性についても専門家から反論がでていし、また効率的な原子炉技術の向上を考えた場合にも、実用規